

平成 25 年度

事業所名 : グループホーム かつひろの家

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0371200239		
法人名	社会福祉法人 江刺寿生会		
事業所名	グループホーム かつひろの家		
所在地	岩手県奥州市江刺区岩谷堂字下惣田290-2		
自己評価作成日	平成25年 10月 10日	評価結果市町村受理日	平成26年 1月 30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=0371200239-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成25年 11月 6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

①昔ながらの行事を行い、季節ごとの楽しみを感じながら、生活を送って頂けるよう支援している。(餅つき・初詣・水木団子ならし・節分・お花見・梅干し作り・葉焼き作り・干し柿作りなど)
 ②ご利用者とともに地元のスーパーや産直への買い物・お祭り見物・お墓参りなどを随時行い、地域との繋がりを図っている。習字作品を奥州市芸術祭に出展し、地域との交流活動を強化した。月に二回程度、習字講師のボランティア訪問あり。同年代の講師の先生との交流も良い刺激となっている(クリスマス会・流しそうめんにも参加) 適度な緊張感もあり、習字も上達している。習字をホール内に展示することで、本人の張り合いにもつながっている。(第〇曜日と決めず、講師の先生の都合の良い日に習字クラブ行っている)③毎日のようにホール内を運動し、歩行機能維持を図っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホーム周辺には、地域住民や、法人が運営する特別養護老人ホーム、そして地域の子供達の通うベビーホームなどが混在する世代を超えた多くの人たちの暮らす地域の中で、近隣の野菜等のお裾分け等による普段からの往来・声がけ・ふれあい、支えあいが行なわれている。開設から12年の交流を積み重ね9月には12周年記念行事を地域の方々と一緒に理解が深まっており無くてはならない・頼られるホームとなっている。ISO(国際標準化機構)によるマネジメントに取り組むなかで、当ホームでは、毎年の事業計画に事業所として取り組む目標や姿勢等を詳細に明記しており、職員及び利用者が同じ目線、方向性が分かるようになっている。その成果もあり、介護度の改善が図られた事例も見られ、また推進会議の提言を得て習字ボランティアの招聘により、利用者が日常的に「書くこと」「考えること」に繋がっていることも特筆できる

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに〇印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に〇印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	〇	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	〇	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	〇	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	〇	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	〇	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	〇	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	〇	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	〇	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	〇	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	〇	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	〇	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	〇	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	〇	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム かつひろの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念①ゆっくりと穏かに②のんびりと楽しく③一緒に笑顔で暮らす家 朝食前に皆で唱和し、共有することで、ご利用者の生活に寄り添ったケアにつなげている。	職員は、毎日、朝食前に掲示する理念を確認しながら利用者と一緒に唱和し、意識付けをしている。その時は、ゆっくり声がけし、決して焦らせるようなことはせず、職員と利用者が一緒に理念を作り上げていけるよう取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	ご利用者と地元のスーパーや産直に買い物に出かけたり、隣接のさくらの郷の餅つきに参加するなど民生委員や地域の方々との交流の場を設けている。市の芸術祭に出展し、地域の方々より多くの反響があった。	普段は、近隣の野菜等のお裾分けによる来所があったり、散歩時に声がけをいただいたり、ベビーホームの子どもたちの来所や声がけを通してふれあいを重ねている。職員も認知症の講演を依頼されるなど地域の中でその信頼度を高めてきている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	かつひろの家の見学や地元学校の職場体験、ボランティアの受け入れを積極的に行なっている。民生委員の紹介により、昨年5月～習字のボランティアの受け入れをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	概ね2ヶ月ごとに開催。日々の状態報告と質疑応答・意見交換を行い、サービス向上に努めている。運営推進員より、介護事故・ヒヤリハットの報告をしてほしいと要望あり、毎回、行っている。 芋の子会を開催し、交流を図った。	状況報告には、多くの写真を参考提示するなど、内容を視覚的に訴えたり、利用者と一緒に芋の子会などを実施し、普段の利用者の生活状況などを知ってもらい、委員から多くの意見等得るべく、工夫を重ねている。大雨時の避難先や増水時の対策などについても、有意義な意見が出されている。	会議には、管理者、ケアマネ、主任が事業所から出席しているが、時々には、居室担当など一般職員も参加して、現場の声を会議に伝えるのも、委員の方々の発言や意見等の参考になるものと思われるので、一考されたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	利用者とともに各書類申請など市役所に申請に出向いている。市の担当者は、運営推進会議の委員にもなっている。	普段には、生活保護関係で、福祉担当者の来所があるほか、地域包括センターとは、対応困難利用者のケースについて連携をとって対応している。保険請求事務など、普段においても、適切な指導を得るなど、緊密かつ円滑な連携が図られている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修を行い、身体拘束の禁止について、全スタッフ共通認識している。 日中は、居室・玄関に施錠せず、センサーの設置により、安全確保している。夜間のみ、防犯のため、施錠している。	ホームで作った身体拘束をしないためのマニュアルを使いながら、研修を行って意識の高揚・共有を図っている。普段にも、職員間のコミュニケーションを良くしながら、強制や抑制など拘束に繋がりそうな言葉づかいを含め気がついたこと何でも、その場でお互いに注意し合える関係となっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会実施。高齢者虐待防止法の理解を図り、虐待防止の徹底に努めている。毎日の生活の中で、利用者に対し、配慮の足りない言葉遣いに関しては、スタッフ同士指摘するよう心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護については、社会福祉協議会や市役所担当と連携している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、ご利用者及びご家族に対し、契約書・契約書別紙・重要事項説明書を説明し、説明・捺印頂いている。また、やむを得ず契約解除となる場合も十分な説明を行い、対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的にご利用者及びご家族にアンケート調査を実施し、意見・要望を頂く機会を設けている。面会時・ケアプランを説明する際も、要望も随時伺っている。	特に出された意見はないが、家族アンケートに加え、利用者の満足度調査を行なっているのが特徴である。毎月、家族に対して、利用者の生活状況を伝える際、なるべく多くの写真を送付し報告するなど信頼構築や意見を得るための工夫をしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ISO 9001 認証取得。8月更新審査済。MR(経営者との懇談会)を実施している。提案の例として、夜勤時間が11.5時間から12時間に変更。	ISOの取り組みの中で、勤務割(朝食時の介助の時間)について、意見が出され、内部で協議し、また関係機関と相談しながら解決を図っている。なお、職員の意見や提案については、職員会議のみならず、いつでも話し合える関係にある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課に取り組んでいる。運営推進会議や職員会議に参加し、状況の把握と対策に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部・外部研修の参加や改善研究の実施を促進し、職員のスキルアップに努めている。改善研究については、法人内で発表会を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	定例会に積極的に参加している。事例検討会にて、発表し、様々な意見を頂いた。勉強と情報交換の場がもてるよう対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	電話があった場合は、ご本人及びご家族に見学を勧めている。見学に来られた際には、現在困っていることを聞きとりし、状況把握と関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	こまめな連絡調整を行い、ご利用者及びご家族の不安解消と状況の確認に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご家族や居宅ケアマネと連絡を密に取り、情報収集と分析を行い、ニーズの把握と対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	人生の先輩であることを常に念頭に置きながら、共に過ごしていくことを心がけている。食事作りや季節行事の際には、どのようにすればよいか利用者の意見を取り入れながら、行っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	開所記念行事や敬老会などの際には参加して頂けるように案内状を送付している。利用料請求書送付の際は、現在の状態、行事予定などを書いた手紙を同封している。面会時には、ケース記録を閲覧して頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	かかりつけの病院への通院、馴染みの人や場所との関係を継続している。ご本人の希望があれば、自宅訪問やお墓参りなども実施している。外出支援も積極的に行なっている。	普段は、買い物先の店員さんや産直の方々とも、回を重ねるごとに、馴染みの関係となっている。利用者皆さん、女性ということもあり、馴染みの美容院に楽しく出かけ、交流も重ねている。時には元職場の同僚の訪問を受け、親しく話し込む方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士と一緒に生活することで、優しい声かけをしたり、手を貸してあげたり、一緒に歩いていたりする。利用者が食堂の椅子を引いてあげたり「家族」という雰囲気作りを心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所が決定した後も利用料支払や荷物の引き渡しの際など、ご家族の訴えや話を聴く姿勢に努めている。また、隣接の特養に入所したご利用者も行事参加の際に声が行い、関係の継続に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式シートを活用。本人の想い、要望の把握に努めている。意思疎通が困難な方でも表情や行動から汲み取る努力をし、ご家族からも情報を得られるよう心がけている。習字は、地域の芸術祭 老人活動展に出展した。	普段の寄り添いや声が行きを通して、聞き取りが出来る方には、声を聞きながら、出来ない方については、家族等からの聞き取りを重ねながら、記録し・共有してケアに当たっている。ホームでの生活は本人本位であり、起床・食事・外出など、無理強いほしないことを基本として対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	プライバシーに配慮しながら、ご本人やご家族から生活歴や馴染みの暮らし方などセンター方式を活用し、把握に努めている。本人の得意なことなど情報を集め、情報を共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	センター方式シートを活用し、24時間アセスメントを行い、生活リズムの把握に努めている。本人のできることできそうなことを見極め、潜在能力の引出に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月一回ケアカンファレンスを実施。現在の状況や課題を把握しながら、ケアプランを作成している。介護保険更新時は、本人・ご家族とともにサービス担当者会議を開催している。	利用者・居室担当による普段の記録や報告を基にして、カンファレンスを行い、それぞれのアイデアや意見を出し合って随時の見直し協議を行うほか、定例的には、3ヶ月ごとを目安に、家族等とも協議を重ねながら、プランの見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の気づきや経過について、個別ケース記録に記載。状態に著しい変化がみられ、サービス内容に変更が必要と感じた場合は、随時、サービス担当者会議を実施し、ケアプランの見直しを図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の重度化により、受け入れが困難になると思われる場合は、同法人の特別養護老人ホームやサービス付高齢者住宅の申込みのアドバイスした。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	隣接施設(さくらの郷、聖愛ベビーホーム)での行事や演芸発表会など地域行事を把握。可能な限り参加している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	職員や家族の付き添いで通院している。現在の状態を主治医に報告。通院後は、ご家族に報告。毎回、通院報告書を作成し、記録して保存している。ご家族が通院する際は、連絡ノートを活用している。	利用開始時からのかかりつけ医の変更はない。通院には、職員が殆ど同行しており家族の同行は少ない。家族が付き添う際には、連絡ノート(記録)を持参していただき、医師との連携(指示を含む)がスムーズにゆくよう工夫している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調に変化がみられる場合は、併設施設の看護職員に連絡・相談を行い、適切な対応ができるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は、医師や看護師に状態を伝え、情報交換を実施した。また、退院カンファレンスには、主治医・看護師・ご家族・ケアマネ同席し、早期退院できるよう支援した。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	非常にデリケートな問題のため、慎重に検討していきたいと考えている。スタッフもターミナルケアについて勉強する必要性あり。延命措置について、本人の意思確認が困難のため、ご家族の意向を伺い、ケアプランに組み入れた。	対応に迫られている利用者がいないこともあり、終末期におけるホームの方針は決めていない。今後、対応を迫られた場合は、利用者の状態・状況に応じて、家族やかかりつけ医、同法人営の施設などとも相談しながら、最善の対応を考えていきたいとし、今後の課題としている。	ホームが、終末期対応に迫られたときのみならず、職員のスキルアップも含めて、機会をみながら、職員の終末期対応の知識や技術に関する勉強会などを一考されたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人にて急変時の対応について、マニュアルを作成。職員会議の際、読み合わせを行い、対応について確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署立ち合いのもと、隣接の特養さくらの郷の協力を得て、避難訓練を年二回実施。(夜間想定)3.11 東日本対震災以降、停電に備えて発電機を購入している。	隣りあう特別養護老人ホームと一緒に地域防災協力を依頼して地域一体となった災害対策に取り組んでいる。避難訓練は、これからは夜間想定を繰り返し行い、職員のいざという時の不安や戸惑いを払拭しながら今後備えたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人の尊厳を常に念頭におきながら、声かけを実施。職員間でもお互いに気になるような際には確認を取り合っている。個人情報の保護について、法人マニュアルに沿って実施。	親しみがある中でも人生の大先輩として尊重をもって対応するため「さん」付けで声かけしている。特にトイレ誘導時の声かけには、利用者の誇りを損ねないよう耳元で話すなど配慮した対応をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	買い物の際、食材の購入の選択やみそ汁の具の相談など選択や決定の場を設けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人のペースを大切にしながら役割や生きがいを見出せるよう支援している。生活リズムを整えるため、一日の概ねのプログラムはあっても、一人ひとりのペースに合わせてゆっくりと生活支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	美容院にてかけて散髪を実施。また、居室前には個別に洗面台を設置し、鏡で身だしなみのチェックがしやすい環境作りに努めている。敬老会などの行事の際はお化粧をし、お洒落を楽しんで頂けるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	旬の食材や畑で採れた野菜を使用し、季節感のある献立を作成。調理の際には、下拵えや盛り付け・味の確認などご利用者に手伝って頂きながら、食事作りを行っている。	職員が献立を作成しているが、利用者のリクエストがあれば、随時変更している。畑の収穫物やお裾分け、冷蔵庫の在庫などを見ながら、散歩がてら買い物に出かけている。殆ど利用者全員が、食事づくり・片付けに参加し楽しい雰囲気の中で食事をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ご利用者の身体状況・健康に合わせて食事を提供。お粥食やミキサー、塩分制限がある方には代替を提供。水分補給は、個々が摂取しやすいよう配慮している。(コーヒーが苦手の方にはお茶など)		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前のうがいや食後の歯磨きを実施。入所時は、口臭がひどい方もいたが、一日三回毎食後、口腔ケアすることで、口臭がなくなった。逆流性食道炎の方は、トイレにもうがいコップを置き、随時、うがいできるようにしている。(床に吐き出すため)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をもとに排泄パターンを把握。リハビリパンツ、パット、布パンツなど日中・夜間で個々に対応している。外に行きたい→尿意・便意の表れの可能性もあるため、本人のサインを見逃さないよう観察。	排泄の自立は、生活の自立に直結するという考え方を職員が共有し合い、しっかりと排泄のパターンやサインを把握しており、適時・適切な声がけ誘導によって、自信を深めるよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立をたてる際には、野菜を多く取り入れ、乳製品(ヨーグルト・牛乳)を提供。水分補給や適度な運動を実施し、便秘の予防に努めている。事前排便が困難な場合は、主治医に相談し、下剤の服用しながら、排便リズムを整えている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	菖蒲湯やゆず湯など季節感を楽しんで頂けるように工夫している。バイタルチェック後、二日に一回は、入浴できるようにしている。本人の気持ちを考慮して、ゆったりと入浴できるようにしている。	清潔の保持等を含めて、週に3回を目安に入浴を勧めており、入浴の時間帯は、希望によって、午後の2時から4時半ごろまでとしている。一番風呂の好きな方、鼻歌を歌う方、職員と話し込む方など、それぞれに楽しみを持ちながら入浴している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	気持ちよく眠って頂けるよう、冬季は、個別に湯たんぽを提供している。眠れない時は、スタッフとゆっくり話をしながら、ココアなど温かい飲み物を飲んでいただき安眠できる環境づくりをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬の説明書は、個人ケースに綴っている。分包された薬袋にも氏名・錠剤の数を記入し、その都度確認。薬の症状や効果について、日々のミーティングで確認し、状態に変化あった場合は、主治医・薬剤師などに相談。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの能力や得意なことが発揮できるような役割を見つけ、感謝の言葉をかけている。(食事作り、茶碗拭き、掃き掃除、俳句、チラシの箱折り、裁縫等)毎日、日記を書いている方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	食材の買い出しや散歩など日常的に外出している。本人の希望があれば、お墓参りや自宅訪問、ご家族との外出など個別での外出の機会を設けている。お花見やつつじ・紅葉見物など季節感を味わっていただけるよう外出している。	外出は、利用者の提案や職員の提案、天候や利用者の体調を勘案しながら、出来るだけ多く出かけることとしている。とりわけ、春(桜の花見)夏(夏祭り)秋(紅葉狩り)冬(白鳥)など、季節の変化を肌身で実感していただき、ストレスを解消、適度な運動と疲労感を得て、快食・快眠につなげている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	通院時や買い物の際は、可能な限りご自分で支払が行えるよう支援している。スタッフ付き添いのもと、利用料の支払いに郵便局や銀行に行く方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	広報を郵送する場合は、ご本人にご家族宛てに手紙を書いて同封している。ご家族から、その字や内容から、本人の状態を汲み取ることができると話あり。年賀状・電話などご家族とのやりとりがスムーズにできるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合った館内装飾を心がけ季節の移り変わりを感じて頂けるよう工夫している。習字作品を展示することで、本人の張り合いにもつながっている。トイレには、嫌な匂いがこもらないように換気とともに消臭剤を置くなど環境設備に努めている。	広いワンフロアに台所、食事テーブルのほか、全員が座れるソファが配置され、高い天窓からは、その場に、やさしく温かい日差しが差し込んでいる。実際に、ゆったりそしてのんびり過ごすことが出来る空間となっている。壁には本日のメニューが大きく掲げられ、食事を楽しみにしながら過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有スペースには、和室・リビング・食堂など思い思いに過ごせる場所を用意している。それ以外にも数カ所に椅子やテーブルを置いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、ベッドやタンスや洗面台がついているが、希望により畳を敷くこともできる。私物の持ち込みは自由。利用者によって、位牌・家具・テレビ・写真など様々なものを持ってきている。	それぞれの居室入り口にはノレンが掲げられ、壁にはカレンダーや家族の写真、習字作品など多くはないものの、キッチンと飾られ女性の部屋らしく演出されている。時には、友人知人が訪問されてお茶とお菓子で過ごす利用者もおられるという。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ・浴室・居室などわかりやすいよう大きく表示。居室毎に洗面台があり、洗顔や歯磨きがスムーズに行えるよう対応。今年度は、東側にスロープ・手摺を新たに取り付け、花火見物の際もスムーズに縁側に出ることができた。		